

二〇二二年三月
「倫理学紀要」第二十九輯 抜刷

資本主義という宗教

——ベンヤミンの断片を手がかりとして

福 嶋 揚

資本主義という宗教——ベンヤミンの断片を手がかりとして

福 嶋 揚

序—ベンヤミンの断片から一世紀後に

本稿はヴァルター・ベンヤミンがほぼ一世紀前に遺した断片「宗教としての資本主義」¹を手がかりとして、倫理学と神学の視点から、資本主義を一種の「宗教」として論じる試みである。

神学 (Theologie) はユダヤ教やキリスト教の自己検証の営みである。² すなわち、これらの伝統宗教が何を根拠 (典拠) とするのか、いかなる歴史を持つのか、何をいかに伝達するのかを研究する学である。ユダヤ人ベンヤミンの思想においてもそのような神学的思考は一部分を成している。³

資本の増殖を究極目的とする経済体制としての資本主義は、歴史的に見るならば重商主義、自由主義、帝国主義の三段階を経たことが知られている。⁴ この歴史は北大西洋地域のキリスト教的諸国家が主導した歴史でもあり、それゆえに経済・宗教・道德の連関の歴史として捉えることもできる。⁵ その前史と起源は、貨幣の登場とともに貨殖術が発展し始めた古代にまで遡る。ベンヤミンが遺した「宗教としての資本主義」という断片は、まさしくそのような経済・宗教・道德の不可分性に光を当てたものである。

ベンヤミンはほぼ百年前の断片の中で、たとえ「資本主義の宗教的な構造」を証明しようとしても「多分野にわたるとてもない論争に陥ってしまったらう」と記している。また「私たちは、自らがその中にいる網を閉じることはできない。けれども将来、このことを広く見通せるようになるだろう」とも記している。⁶それからほぼ一世紀を経た今日、まさしくベンヤミンが予感した通り、グローバル化した資本主義は経済学者の手だけに委ねることができない、多分野を横断する学際的な問題になったのではないだろうか。そのような経済・宗教・道徳の相互関係を論じた学際的研究が今日、極めて豊かに蓄積されつつある。⁷ベンヤミンの断片「宗教としての資本主義」をめぐる近年の研究もまた、まさにそのような研究動向に属している。⁸

この断片は発表を意図して書かれたものではなく、難解であり錯綜している。ベンヤミンが約一世紀前に描いた資本主義は非合理的で自己破壊的であり、しかもそこからの「逃げ道」がほとんどない。⁹それはあたかも今日のグローバル資本主義が引き起こしている地球上の様々な危機と、そこからの逃れ難さを予見していたかのように見える。

以下の本論においては、まずベンヤミンが描く資本主義の特徴をたどる（一―四章）。続いて資本主義とキリスト教の関係（五章）、さらに資本主義と批判的に対峙する視点（六章）をベンヤミンに沿いつつ、またベンヤミンを敷衍しつつ、論じることにはしたい。何よりもベンヤミンのテキストを手がかりとして、資本主義が孕む根本的問題、さらに経済・宗教・倫理の連関を照射することを試みたい。この三つの領域を横断して結びつける様々な問題が存在するが、本稿ではその中でもとりわけ負債、罪（Schuld）という問題に注目する。

その際、ベンヤミンの断片から百周年を記念して出されたドイツ語の研究論集『資本主義という、死をもたらす負債の祭儀―ヴァルター・ベンヤミンの預言的遺産』（2021）を参照し、難解な箇所を読み解く一助とした¹⁰い。この論集の特徴は、ラテン・アメリカの「解放の神学」の伝統に倅差しつつ、西欧におけるキリスト教と

資本主義の癒着をベンヤミンの断片の読解を通して批判している点にある。

一 ひとつの宗教としての資本主義

「宗教としての資本主義」は、ドイツ語でわずか四ページに満たない断片である（以下においては断片と略記する）。その中でベンヤミンは資本主義の特徴を大胆に描いている。それは主に以下のような四点にわたる。

- 1 資本主義は祭儀宗教である。¹¹
- 2 この祭儀宗教は永遠に続く。
- 3 この祭儀宗教は人間と神の双方に罪を背負わせる。
- 4 この祭儀宗教は神を隠ぺいする。

この四点がベンヤミンの断片の主要な論点であるが、いずれも奇抜でわかりにくい。

ベンヤミンは資本主義を「一つの宗教 (eine Religion)」¹² と言うが、「宗教」を定義する宗教学的議論は断片の中に見られない。「一つの」という不定冠詞は、他にも複数の宗教が並存することを前提としている。断片の内容やベンヤミン自身の出自から考えれば、「宗教」の具体例は何よりもまずユダヤ教やキリスト教である。¹³ またこれらの伝統宗教によって「異教」扱いされる古代の宗教への言及も断片の中に見られる。資本主義は、これらの諸宗教によって答えを与えられていたのと「同じ心配、苦しみ、不安を鎮めるのに役立っている」とベンヤミンは言う。¹⁴

こうした宗教の鎮静作用の具体的な内容は説明されていないが、ベンヤミンが断片の中で以下のように書いていることは、一つの手がかりとなる。

「さまざまな宗教における聖人像と、さまざまな国家における銀行券との比較。銀行券の装飾に現われている精神。(中略) 方法論的に、まず調べるべきことは以下のことだ。かつて歴史の経過のなかで、金(カネ)は神話とどのような関係を結び、キリスト教からかくも多くの神話的要素を取り入れて、固有の神話を構築できるようになったのか。」¹⁵

ユダヤ・キリスト教における超越神に相当する存在は、資本主義においてはマネーまたは資本と言ってよい。¹⁶ 宗教における神も、経済におけるマネーも、人間にとつての究極の信仰(credo)あるいは信頼(credit)の対象である。両者とも生存にともなう様々な「心配、苦しみ、困難」を克服する手段あるいは根拠という点では似ている。ベンヤミンの断片は「宗教」を定義していないが、宗教(religio)とはさしあたり、絶対的な信頼対象へと自らを結び直すこと(re-ligare)、或いは究極の存在者を顧慮すること(re-legere)と考えてよいだろう。¹⁷

「信頼」と「信仰」に象徴されるように、経済的概念と宗教的概念はしばしば類似あるいは重複する。経済も宗教も、いずれも人間の生存に不可欠な交換活動―宗教の場合は超越者と人間のあいだの交換―に根ざしていることを考えれば、それは驚くべきことではない。¹⁸

とはいえこの断片を読み進めてゆくと、ベンヤミンが資本主義のことを「未成熟な神性(eine ungeriffte Gottheit)」と見なしていることがわかる。しかも資本主義は不安を鎮められず、人間をその中に閉じこめて逃げ道を奪うことも明らかとなる。それどころか資本主義の信奉者はそのことを隠さなければならないと言われる。¹⁹ それについては後ほど第四章で論じることにはしたい。

その一方で、ユダヤ教やキリスト教が成熟した宗教であるといった擁護や肯定も、この断片の中には見られない。とりわけ近代西欧のキリスト教は、資本主義によって力を奪われて主権交代させられたとベンヤミンが考え

ていることが、断片の後半で述べられている。それについては後ほど第五章で論じることにした。

資本主義を新たな一宗教と見なす点において、ベンヤミンの断片はマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と対立する。ウェーバーによれば、カルヴァン派の倫理が近代西欧資本主義の発達のための前提となったが、その後に資本主義はキリスト教から独立していった。だがベンヤミンは、資本主義とは「ウェーバーの考えとは異なつて、宗教的に条件づけられた形成物であるだけではなく、本質的に宗教的な現象」だと記している。資本主義の社会は、世俗化された社会ではなく今なお宗教的な社会、言いかえれば偶像や物神への信仰に基づく社会である。しかもベンヤミンの断片が描く資本主義は非合理的で破滅的なものである。²¹そのような非合理性、矛盾、狂気をベンヤミンの断片に沿って、さらに明らかにしてゆきたい。

二 永遠に続く祭儀宗教

ベンヤミンによれば、宗教としての資本主義の第一の特徴は「祭儀宗教、ことによると、これまでに存在した最も極端な祭儀宗教」だという点にある。またこの祭儀宗教は「いかなる特殊な教義学も神学も知らない」という。²²

祭儀とはそもそも何かという定義も断片の中に見られない。ベンヤミンを論じるコロンビアの神学者カルロス・アンガリータの言葉を借りれば、祭儀宗教 (Kultreligion) とは「文化 (Kultur) を創り出す構造、すなわち、存在・行為・世界・歴史の理解を育む (kultivieren) もの、端的に言えば、そこで人が生きる複合的な関係システム」である。²³このような祭儀を検討し根拠づける学問である神学は、ユダヤ教やキリスト教にとっては本来必要不可欠である。

ところがベンヤミンによれば、資本主義という祭儀宗教にはいかなる信仰の知解も存在しない。彼が断片の中
で言わんとすることは、資本主義という宗教において何よりも重要なことは実践だということである。ベンヤミ
ンは資本主義を古代の「異教」と比較しながら、両者とも「高次の道徳的な関心」によってではなく、「最も直
接的で実践的な関心」によって支配されていると言う。²⁴ また「功利主義」が「この観点のもとで宗教的なニュ
アンスを持つ」とも言っている。マネーや商品や財産といった偶像あるいは物神を操作することこそが祭儀であ
り、そのような実践以外のものには何の意義も認められないということが、ベンヤミンの言わんとすることであ
ろう。

さて、宗教としての資本主義の第二の特徴は、それが「永久に続くこと」である。人間は「休戦もなく恵みもなく」
祭儀を執り行わねばならない。「そこには『平日』が存在しない。そこに存在する日は、ありとあらゆる神聖な
華やかさに満ちあふれ、崇拜者が極端に緊張させられるという、ぞっとするような意味での祝日でしかない」と
ベンヤミンは述べている。²⁵

こうでは「休戦もなく恵みもなく」(sans [l'éve et sans merci]) というフランス語が唐突に現われる。これはシャ
ルル・ボオドレールの詩「黄昏」からの、若干言葉を変えた引用ではないかと思われる。²⁶ ベンヤミンは隣国フ
ランスをたびたび訪問し、とりわけボオドレールが描くパリの爛熟し退廃した商品社会を念頭に置いていた。²⁷

商品社会においては、金稼ぎと資本の蓄積があらゆる生活領域を包括する本質的な動機となる。賃金労働者は、
自らが生産したものを買い戻す消費者として、たえまなく資本主義の祭儀に適応させられる。²⁸ それはあたかも
「永久に続く」自己再生産のシステムであるかのように見える。

ピューリタンはカトリック教会の伝統的祝祭日が人間を怠惰にすると見なして、それらの多くを廃止した。資
本の増殖運動それ自体は、法的あるいは社会的に規制されない限り、いかなる中断も知らない。その信奉者であ

る債権者―どちらドイツ語で Gläubiger である―は、「極度に緊張しながら」株の上下動を見守り続ける。それは昼夜を問わず、季節を問わず、ゆりかごから墓場まで、人間を支配し続ける。²⁹ マネーと資本はあらゆる時間と場所を包摂して、永遠、遍在、聖なるものの相貌を呈する。このような物神と人間の関係こそが、ベンヤミンの言う永遠の祭儀であろう。

三 罪を背負わせる宗教

さて、資本主義という宗教の第三の特徴は「罪を背負わせる (verschulden)」ということである。これは恐らく「罪を贖って取り除く (entsühnen)」ではなく、罪を背負わせる祭儀の最初の事例」だとベンヤミンは言う。³⁰

ユダヤ教の贖罪日やキリスト教の聖餐式が、それぞれの宗教において罪の赦しを告げる中心的なものであることと対比するならば、あえて罪を背負わせる祭儀とは、それとは真逆の異様なものである。前章で引用した「これまで存在した最も極端な祭儀宗教」というベンヤミンの言葉も、このことから理解できる。

しかもベンヤミンによれば、この罪は「悪霊的 (デモニッシュ) な二義性」を帯びている。³¹ これはドイツ語の罪 (Schuld) が、道徳的な負い目だけでなく経済的な負債をも意味することを指している。単数形は道徳的な罪や法的な責任を意味し、複数形は経済的な負債を意味する。

良心の咎めであれ金銭的な債務であれ、こうした二義的な罪と無縁な人間は存在しない。それがとりわけ「デモニッシュ」なものとなる理由は、ベンヤミンの以下の叙述から読み取ることができる。

「この点でこの宗教システムは、ひとつの途方もない運動が転落していく渦中にある。みずからの罪を贖って

取り除くことができない、ひとつの途方もない罪意識が、祭儀を行って、そこでこの罪を贖うのではなく普遍的なものとなし、意識にこの罪を叩き込み、最後に、何よりも神自身に罪を贖い取り除くことへの関心を喚起するために、神自身をこの罪へと引き入れるのだ。従ってここでは、罪を贖って取り除くことは、祭儀そのもののうちには期待できないし、この宗教の改革のうちにも期待できない。資本主義というこの宗教的運動の本質にあるのは、最後まで耐えること、神がついに罪を完全に背負うまで、かろうじて期待される絶望という世界状態に到達するまで、耐えることである。資本主義が歴史上前代未聞であるのは、宗教がもはや存在の改革ではなく、存在の粉碎であることだ。絶望を宗教的な世界状態にまで、そこからの治癒が期待される状態にまで拡大すること。」³²

ここで描かれているのは、資本主義の拡大とともに、道徳的な罪意識と経済的な負債が蔓延し、人間と世界の全体が粉碎 (Zertrümmerung) され、廃墟 (Trümmer) と化する事態であるように思われる。³³ 神が罪へと引き入れられるということについては、次章で改めて論じることにして、ここではいったん人間関係における罪に論点を限定したい。

罪は、それが道徳的なものであれ物質的なものであれ、人間が生きるために行う交換によって必然的に発生する。それは贈与に対する未返礼、貸与に対する未返済、略奪や損害に対する未賠償といった状態である。絶えざる交換過程を生きる人間にとって、罪は不可避的な存在条件である。

だがその罪は資本主義の下で「デモニッシュ」なものに変貌する。そこでは負債が金銭化、計量化され、さらに変動する金利という市場法則の見えざる手に引き渡される。そればかりか「負債は皆済されねばならない」という道徳に基づいて、返済しない者は処罰される。³⁴ 金融資本は個人、家族、企業、国家に負債を負わせ、そ

れらを返済能力によって評価する。万人が自己利益を追求する「経済人(homo economicus)」になるのと同時に「負債人(homo debitor)」となる。分断された個々人は国家や企業が外部化するコストやリスクをわが身に引き受ける。³⁵富裕は選びと救いの徴となり、貧困は罪と呪いの徴となる。金持ちと貧乏人の違いは、前者が節約し勤勉である一方で、後者が浪費し怠惰であるという違いに帰せられる。このようなプロテスタンティズムの倫理の極限的誇張は、市場原理主義に順応した現代のキリスト教の中にも見受けられる。³⁶資本主義という祭儀宗教の中での唯一の救いは、祭儀そのものに一層いそしむことだけである。

資本主義は存在(Sein)を所有(Haben)に置き換え、³⁷人間関係を商品関係に置き換え、あらゆる希少性を市場価値に置き換える。万物の商品化は永遠に続くかのように見えても、いつか限界に達して、最後には「粉砕」と呼ぶべき破局が待ち受けている。

四 神を隠蔽する宗教

ベンヤミンによれば、資本主義という宗教の第四の特徴は、罪へと引き入れられた神を隠ぺいすることである。そのことをベンヤミンは以下のように述べている。

「神の超越は地に落ちてしまった。しかし神は死んだのではなく、人間の運命のなかに取り込まれたのだ。人間という惑星がこの軌道の絶対的孤独のなかで、絶望の家を通り抜けていくことが、ニーチェの規定するエーロスである。この人間が超人、すなわち資本主義的宗教を認識しつつ実現し始める最初の人間なのである。この宗教の第四の特徴として、この宗教の神は隠されねばならず、罪を負う絶頂においてはじめて語りかけるこ

とが許される。祭儀は未成熟な神性の前で執り行われ、この神性についてのいかなる表象も思考も、この神性の成熟の秘密を汚してしまう。」³⁸

ニーチェが説いた「神の死」をベンヤミンはここで「神の隠蔽」と捉え直す。超越神の失墜、言いかえれば西欧キリスト教の衰退は、資本主義の台頭と表裏一体である。キリスト教の神像は人間の運命に取り込まれて変容させられ、不可視化される。ニーチェは無神論的人間像を打ち立てることによってキリスト教を去ろうとしたが、ベンヤミンはそのようなニーチェの超人像を資本主義という新しい宗教を体現するものと見なす。³⁹

伝統的な信仰対象としての神に代わって、資本という神性もまたすべてを包摂して規定する現実になる。その中に閉じこめられた人間は「惑星」のように円環運動を繰り返す。個々人は生産者および購買者として、「勤労せよ」と「消費せよ」という二重の規範の下で、絶えず自らを管理し維持する。⁴⁰

ただしベンヤミンによれば、資本は未成熟な神性であり、いわば神に成ろうとする途上にある。アブラハム宗教の神が終末時における救済（Erlösung）を約束するのと似て、この新たな神性も絶えざる進歩や最大の収益（Erlös）という救済を約束するが、その約束を永久に果たすことなく、先延ばしし続ける。罪を背負わせられ続ける人間から見れば、資本という神性もまた罪深い。負債の蔓延とともに人類の大多数が恩恵から排斥される。その負債が決して免除されないことを資本主義の信奉者は隠し続けねばならない。負債が極限にまで達した時、負債はあわよくば免除されるのではないかという期待を捨てきれずに。⁴¹ベンヤミンが言わんとしたことは、以上のようなことではないだろうか。

五 キリスト教に寄生する資本主義

そもそも「宗教としての資本主義」という表現を先に用いたのはエルンスト・ブロッホ著『革命の神学者トーマス・ミュンツァー』であり、ベンヤミンの断片はそれに影響されたという指摘がある。⁴²確かにブロッホのこの著作はベンヤミンの断片と同年に出版され、ベンヤミンもそれを読んだことが確認できる。⁴³ブロッホはそこで、宗教改革者カルヴァンがキリスト教を破壊して「新しい『宗教』の諸要素、すなわち宗教としての資本主義の諸要素」を導入し、「マモン（富）の教会」を建てたと述べている。⁴⁴この考え方にはまさにベンヤミンの断片と重なる部分がある。⁴⁵例えばベンヤミンは次のように述べている。

「カルヴァン派のみならず、その他の正統的キリスト教の諸傾向においても証明されるにちがいないが、資本主義はキリスト教に寄生しながら西洋において発展してきたのであり、キリスト教の歴史とはつまるところ本質的に、その寄生者である資本主義の歴史と言ってよいくらいだ。（中略）宗教改革時代のキリスト教が資本主義の発生をうながしたのではなくて、宗教改革時代のキリスト教が資本主義へと変貌をとげたのである。」⁴⁶

ベンヤミンによれば、西洋史においてはキリスト教が「宿主」であり、資本主義がその「寄生者」である。この比喩に従えば、資本主義はキリスト教から養分を吸い取り、減ぼすことなく服従させる。宗教改革において、資本主義は宗教的に動機づけられつつ宗教から離脱していったのではなく、それ自体が宗教として発展し始めた。資本主義はその際キリスト教における贖罪を否定し、さらにその祭儀的性格を極端にまで押し進めた。

神学者アンガリータはベンヤミンのこのような歴史観を補足して、まずキリスト教そのものが古代において祭

儀宗教化していった前史に注目する。⁴⁷ 原始キリスト教は、古代イスラエルの信仰の基盤をなす律法に対する批判的運動として発展し、やがてユダヤ教から分離していった。けれども四世紀にキリスト教が帝国宗教になったことによって、当初の思想的な核心が失われていく。それはコンスタンティヌス皇帝が、キリスト教を文字通り祭儀宗教化したことによって起きた。コンスタンティヌスは礼拝行為それ自体を貢税として承認し、礼拝を司る聖職者から貢税を免除した。司祭はこれ以降、原始キリスト教の時代にはありえなかった特権的地位を占めるようになる。礼拝＝レイトゥルギア (εὐχολογία, Liturgie) が元来持っていた、共同生活を維持する労働や活動という意味合いは失われて、儀礼的な祭儀 (ἱερί) へと狭められていった。そしてペンヤミンによれば、このような祭儀宗教からさらに贖罪の理念を抜き去って「最も極端な祭儀宗教」と化したのが西欧資本主義である。とりわけ宗教改革以降、ペンヤミンが指摘する通り、資本主義はキリスト教の影響をますます離脱すると同時に、宗教的な特徴を帯びるようになった。それはすべてを包摂し、遍在し、生存を約束する一方で、生存に負荷を背負わせ続ける最高権威、負債の減免 (罪の赦し) の福音なき宗教となった。

見落としてはならないのは、負債のまさに「デモニッシュ」と言うべき二義性、否それ以上の多義性である。それは経済的な借金だけでなく、破壊された自然環境や産業廃棄物が個人、社会、国家、未来世代に外部化される事態でもある。こうした負債の責任転嫁、とりわけ産業革命以降の外部化がひきおこす災禍が、もはや局地的なものにとどまらず、地球全土に広がってしまった事態が、今日の気候崩壊の危機にほかならない。⁴⁸ ペンヤミンが一世紀前に述べた「存在の粉碎」は、地球規模で具現化しつつあるのではないだろうか。

六 宗教批判と資本主義批判

「存在の粉碎」を回避する道は果たしてあるのだろうか。ベンヤミン自身は断片の中で資本主義のもたらす絶望的な閉塞状況を描きながら、同時に資本主義からの「逃げ道」を探っていたように思われる。というのも、断片の中にはいくつかの書名とページ数が記されており、彼がそこから資本主義を克服する方途を読み取ろうとしたことがうかがわれるからである。

例えば、無政府主義者グスタフ・ランダウアーの著『社会主義への呼びかけ』(1919)が挙げられている。ランダウアーは自然や共同体への「改心(Umkehr)」を説くロマン主義的な社会主義者だった。このランダウアーの説く「改心」を用いて、ベンヤミンがマルクスやニーチェを論じたと思しき箇所が、断片の中に見られる。⁴⁹或いは哲学者エーリッヒ・ウンガーの『政治と形而上学』を挙げて、そこから民族の「移動による資本主義の克服」を読み取ろうとしたこともうかがわれる。⁵⁰

とはいえ、それらの散発的な着想を別とすれば、断片の筆致は全体として、資本主義が極限にまで押し進められて破局が到来すること、すなわち絶望だけが唯一の希望であるかのような悲観を基調としている。

本稿の結びとして、ベンヤミンを敷衍して述べておくべきことがある。それは、ベンヤミンの断片が資本主義と対峙した最も根本的な視座は、ベンヤミンが否定的に用いた伝統宗教の理念の中にこそあるということである。それは言うまでもなく罪の赦し、負債の免除の理念である。西欧キリスト教の主流派は、この理念の「正義性」つまり単なる個人道徳を超える経済的社会的な意義を見失って、それをまさにベンヤミンが言う「心配、苦しみ、不安を鎮める」鎮痛剤、良心の密室における慰めへと矮小化してしまった。⁵¹

その意味で、ベンヤミンの断片には二重の宗教批判が含まれている。一つは資本主義という宗教に対する批判

であり、もう一つはそれに屈従したキリスト教に対する批判である。⁵²その重層的な批判は、古代ユダヤ教や原始キリスト教そのものにまでさかのぼる。それは自宗教に対する批判と変革として現われた。トーラー、預言者ナザレのイエスは、貨幣経済や富（マモン）の支配がもたらす弊害と対峙し、同胞から利子を取りたてることを禁止し、債務帳消しを説き、富（マモン）の神格化を否定した。⁵³

例えばイエスは「主の祈り」において「われわれ」相互の「罪の赦し」を求める。⁵⁴「罪（ὁμολογια, ἀμαρτία）」や「赦す（ἀφίημι）」といった概念は商業的金銭的な意味を含む。⁵⁵しかもその罪は「われわれ」という一人称複数の債務、つまり個人責任に帰することができない社会的構造的なものである。このような負債の減免、債務奴隷からの解放は、相互の自由と平等を目指す社会変革にとって必要不可欠なものであった。

この点にこそ資本主義とユダヤ・キリスト教の解消できない相違がある。資本主義においては利潤追求と負債増大が緊密に結び合わさっており、そこからの逃げ道は閉ざされているが、ユダヤ・キリスト教はそのような連鎖を断ち切る理念を少なくとも持っていた。

「解放の神学」の伝統に倅差すベンヤミン研究者たちはまさにこの点を強調する。⁵⁶これらの論者たちに共通する逆説は、宗教が絶えざる宗教批判を不可欠の本質とするということである。そこで重視されることは、神が存在するか否かといった思弁ではなく、現実の生死を分かち理念は何かということである。それはすなわち、負債によって死をもたらす物神崇拜に対する批判と、生への解放をもたらす罪の赦しの理念の顕揚である。⁵⁷ベンヤミンの断片はまさにそのような意味で、資本主義と西欧キリスト教に対する二重の宗教批判を含んでいると言ってよいだろう。

脚注

- 1 Walter Benjamin, *Kapitalismus als Religion* [Fragment], in: *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, 7 Bde, Frankfurt am Main 1991, Bd. VI, 100-102. 邦訳はヴァルター・ベンヤミン「宗教としての資本主義」、『ベンヤミン・コレクション7』、浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫 2014、526-532。ベンヤミンからの引用に際しては、その都度独自に翻訳する。
- 2 「自己検証 (Selbstprüfung)」という語については、キリスト教神学者カール・バルトの『教会教義学』から示唆を得ている。Karl Barth, *Die Kirchliche Dogmatik*, I/1, Zürich 1932, 1. バルトによれば、信仰が「何を典拠とするか」を扱うのは聖書学、「いかなる歴史を持つのか」を扱うのは教会史、「何を伝達するか」を扱うのは組織神学（教義学と倫理学）、「それをいかに伝達するのか」を扱うのは実践神学である。
- 3 三島憲一『ベンヤミン―破壊・収集・記憶』（岩波書店2019）、第三―四章を参照。
- 4 宇野弘藏著『経済原論』（岩波書店1954）や同著『経済政策論』（弘文堂1954）を参照。
- 5 北大西洋を取り巻くキリスト教的かつ資本主義的な諸国家―スペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、アメリカ―が、今日の気候崩壊に至るグローバルな危機の元凶だという告発を看過することはできない。そのような問題を論じた文献として、例えば以下のものを参照。T&T Clark *Handbook of Christian Theology and Climate Change*, Edited by Ernst M. Conradie & Hilda P. Koster, London/New York/Oxford/New Delhi/Sydney 2020.
- 6 Benjamin, 100.
- 7 そのような学際的文献の一例として、ハイデルベルク大学神学部での筆者の指導教授でもあった組織神

- 学者ベンヤエル・ヴェルカーによる以下の論集を挙げておきたい。Money as God? The Monetization of the Market and its Impact on Religion, Politics, Laws, and Ethics, Edited by Jürgen von Hagen and Michael Welker, Cambridge University Press 2014.
- 8 例として以下のベンヤミンの研究を参照。Der Kult des Kapitals. Kapitalismus und Religion bei Walter Benjamin, hrsg. von Mauro Ponzio, Sarah Scheibberger, Dario Gentili, Elettra Stimili, Heidelberg 2017.
- 9 Benjamin, 102.
- 10 Kapitalismus: Kult einer tödlichen Verschuldung, Walter Benjamins prophetische Erbe, hrsg. von Kuno Füssel und Michael Ramminger, Münster 2021.
- 11 Kultreligion の邦訳は「礼拝宗教」となっているが、本稿では「祭儀宗教」で統一する。後ほど言及する「礼拝」(Liturgie, Gottesdienst) といった他の概念と区別するためである。
- 12 断片よりも前のベンヤミンの宗教理解については、哲学者ベンヤエル・ブリーの論文を参照。Michael Brie, Warum Kapitalismus keine Religion ist. Verteidigung der Religion gegen die Kapitalismuskritiker unter ihren Verächtern, in: Kapitalismus, 62-81.
- 13 三島憲一の前掲書や、柿木伸之『ヴァルター・ベンヤミン―闇を歩く批評』(岩波新書 2019) を参照。
- 14 Benjamin, 100.
- 15 A.a.O., 102.
- 16 Franz J. Hinkelammert, Die Grundlage des Kultes: Der Kult von Geld und Gold, in: Kapitalismus, 331-340.
- 17 ハッパの宗教の定義は、神学者ハンス・キュンクの以下の文献から示唆を得たい。Hans Küng, 24 Thesen zur Gottesfrage, München/Zürch 1986, 44.

- 18 Kuno Füßel, Die leere Zeit und die erfüllte Zeit. Giorgio Agamben liest Walter Benjamin, in: Kapitalismus, 10-30, 12-15.
- 19 Benjamin, 101.
- 20 A.a.O., 100.
- 21 Dick Boer, Werden wir je von der Religion erlöst sein?, in: Kapitalismus, 49-61, 50f.
- 22 Benjamin, 100.
- 23 Carlos E. Angarita S., Kritik der Religion statt Kapitalismus als Religion. Eine Interpretation Walter Benjamins im Kontext der Gemeinschaft von Bojaya. Kolombien, in: Kapitalismus, 174-197, 179.
- 24 Benjamin, 100.
- 25 Ebd.
- 26 Charles Baudelaire: Oeuvres complètes et annexes - annotées et illustrées - Arvensa Editions 1868 (Kindle), 254. シャルル・ボードレール『悪の華』（鈴木信太朗訳）、岩波文庫 1961（2021）、288。鈴木訳は「休息も情け容赦もなく」であり、ボードレールの原文は“ni trêve ni merci”である。だがドイツ語のベンヤミン全集では“so von da”という一文字が欠けて、“sans rêve et sans merci”と記されている。これはベンヤミンの断片を読み違えたものではないかと以下の文献の脚注が指摘している。Uwe Steiner, Die Grenzen des Kapitalismus. Kapitalismus, Religion und Politik in Benjamins Fragment »Kapitalismus als Religion«, in: Kapitalismus als Religion, Hrsg. von Dirk Baecker, Berlin 2019, 285, Anm. 25.
- 27 ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』第一巻（岩波文庫 2020）の「三島憲一による巻末解説を参照」。
- 28 神学者ウルゲン・クロートによれば、ウェーバーがカルヴィニズムの中に金稼ぎの理想に対する特別な適応

- 性を見出したことは対照的に、ベンヤミンが見る資本主義という祭儀宗教においては金稼ぎ以外の道が閉ざられてゐる。Jürgen Krotz, *Du sollst keine anderen Götter neben mir haben. Zur Funktion einer theologischen Religionskritik im zur Religion gewordenen Kapitalismus*, in: *Kapitalismus*, 220-234, 226.
- 29 上の点は社会学者であり哲学者でもあるミヒヤエル・レーヴィのベンヤミン論を参考にしている。Michael Löwy, *Der Kapitalismus als Religion. Wie aus dem „Haus der Verzweiflung“ herauskommen?* Walter Benjamin und Max Weber, in: *Kapitalismus*, 276-294, 281.
- 30 Benjamin, 100.
- 31 A.a.O., 102.
- 32 A.a.O., 100f.
- 33 「粉碎」については神学者アンドレアス・ヘルガーマンの論文を参照。Andreas Helligermann, *Ästhetik, Konsumismus, Zertümmierung*, Benjamin lesen, in: *Kapitalismus*, 123-140.
- 34 「あらゆる負債は返済されねばならない」という経済的道徳が、中世キリスト教の贖罪論と表裏一体のものであることを神学者ウルリッヒ・ドゥクロヴが指摘している。ドゥクロヴは、商業世界を拡大した十字軍の時代、カンタベリー大司教アンセルムスがそのような贖罪思想を展開したことに注目している。Ulrich Duchrow, *Retrospektive und Prospektive zu Walter Benjamins „Kapitalismus als Religion“*, in: *Kapitalismus*, 82-104, 93f.
- 35 この点は筆者の学会発表「罪の赦しと負債の減免―信仰と経済の一接点」(二〇一六年九月十四日、日本キリスト教学会、於広島女子大学)に基づく。
- 36 神学者イエルク・リーガーは、アメリカにおけるキリスト教の福音派右派と市場原理主義の親和性を論

27 Joerg Rieger, *Kapitalismus, Christentum und die Zukunft der Religion in den USA und Europa*, in: *Kapitalismus*, 141-155.

37 Löwy 286.

38 Benjamin 101.

39 この点は神学者ミヒャエル・ラミンガーの以下の論文に負っている。Michael Ramminger, *Kapitalismus: Der erste Fall eines verschuldeten Kultus*, in: *Kapitalismus*, 314-330, 322-324.

40 この点は神学者ユリア・リースの以下の論文を参考にしている。Julia Lis, *Schuld und Erlösung. Überlegungen zum Verhältnis von Ökonomie, Politik und Moral im Neoliberalismus*, 156-173.

41 この解釈は以下の箇所を参考にしている。Löwy 283; Angarita 185f; Ramminger 322f.

42 レヴィは、ベンヤミンの断片がウェーバーのみならずブロッホから影響を受けた経緯をおよそ以下のように説明している。ブロッホはかつてハイデルベルクのウェーバーの集いに属していた。ウェーバーの資本主義に対する態度は価値中立的、諦念的なものだったが、ブロッホはそれを反資本主義の思想へと展開していった。ウェーバーは資本主義の精神の発展に際してカルヴィニズムが果たした役割について価値中立的な分析を行ったが、カトリシズムに魅了されていたマルクス主義者ブロッホは、それを資本主義とそのプロテスタント的起源に対する批判と捉え直した。ベンヤミンの断片はこのブロッホの著書を読んだことに影響されたものである。(Löwy 292)

43 Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe* Bd. II, Frankfurt a.M. 1977, 212f.

44 Ernst Bloch, *Thomas Münzer als Theologe der Revolution* (1921), Frankfurt am Main 2016, 123.

45 ただし、ブロッホが抱いていた原始キリスト教や中世カトリシズムの経済的イデオロギーへの共感をベン

ヤミンは共有してはいなかったと、レヴィは指摘している (Löwy 202)。ブロッホとベンヤミンの関係についてはいずれに以下の論文を参照。Werner Hamacher, *Schuldgeschichte. Benjamin's Skizze »Kapitalismus als Religion«*, in: *Kapitalismus als Religion*, 77-119.

46 Benjamin, 102.

47 Angaria 176-178.

48 より詳しくは以下を参照。福嶋揚「気候危機とキリスト教の罪責―宗教批判的な考察」(『無教会研究』第一四号、無教会研究所 2021、90-113)。

49 Benjamin 101; Gustav Landauer, *Aufruf zum Sozialismus*, Berlin 1919, 144f.

50 Benjamin 102; Erich Unger, *Politik und Metaphysik*, Würzburg 1924, 44.

51 ドイツ語圏のいくつかの標準的な神学事典を参照すると、「罪 (Schuld)」は宗教的／哲学的／心理学的／法的／倫理的／神学的といった諸観点から叙述されている。これらの事典の「罪 (Schuld)」の項目は、聖書の「罪」概念が金銭的経済的な意味を含むことに言及してはいる。しかしそれ以上には、金銭的経済的な意味での「罪」それ自体をほとんど論じていない。もっとも「債務危機 (Schuldenkrise)」と題された、途上国の債務問題を論じる項目は、別に設けられている。また「罪 (Schuld)」の項目においては、「罪」とは規範や規則への違反であるという定義が一般化している。しかしその定義は、そのような規範自体がどのように成立したのかを問わない、つまり規範を自明のこととする結果、「負債とは原則として、規範に従って、返すべきものである」という主張に陥っているように見える。参照したのは以下の文献である。

Bernhard Bron, Art. Schuld, in: *Evangelisches Kirchenlexikon*, Bd. 4, Göttingen 1996; 114-118; Joseph Schuster, Art. Schuld, I. Philosophisch-anthropologisch, in: *Lexikon für Theologie und Kirche*, Bd. 9, Freiburg/Basel/Rom/

- Wien 2000, 276f.; Thomas Fuchs, Art. Schuld, II. Psychologisch, in: a.a.O., 277; Horst Bürkle, Art. Schuld, III. Religionsgeschichtlich, in: a.a.O., 278f.; Michael Theobald, Art. Schuld, IV. Biblisch-theologisch, in: a.a.O., 279f.; Joseph Schuster, Art. Schuld, V. Systematisch-theologisch, in: a.a.O., 280f.; Jürgen Werbick Art. Schuld, VI. Theologisch-ethisch, in: a.a.O. 281f.; Klaus Rüdike, Art. Schuld, VI. Rechtlich, VII. Kirchenrechtlich, in: a.a.O., 282f.; Bernd Lutz, Art. Schuld, IX. Praktisch-theologisch, in: a.a.O., 283f.; Michael Beinker, Art. Schuld, in: Evangelisches Soziallexikon, Stuttgart 2001, 1371-1374; Theia Bauriedl, Art. Schuld/Schuldgefühl, A. Tiefenpsychologisch, in: Neues Handbuch Theologischer Grundbegriffe, Bd. 4, München 2005, 111-122; Hermann Häring, Art. Schuld/Schuldgefühl, B. Theologisch, in: a.a.O., 123-129; Christiane Axt-Piscalar, Art. Schuld, in: Taschenlexikon Religion und Theologie, Bd. 3, 2008, Göttingen 1071-1073. Walter Eberlei, Art. Schuldenkrise, in: Evangelisches Soziallexikon, Stuttgart 2001, 1374-1378.
- 52 Kroth 230-234.
- 53 Claus Lücker, Zinsverbot und Schuldenerlaß. Eine bibeltheologisch-sozialgeschichtliche Studie zur Frage nach ethischen Kriterien für Kapitalanlagen kirchlich-institutioneller Anleger in Deutschland, Frankfurt am Main 1999.
- 54 マタイ六章十二節、ルカ十一章三節。
- 55 以下の項目を参照。Peter Fiedler, Art. ἀναγνῖς, in: Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Bd. I, Stuttgart/Köln/Berlin 1992, 157-165; Herbert Leroy, Art. ἀφῆρη, in: a.a.O., 436-441; Michael Wolter, Art. ὁφειλῆς, in: EWNT Bd. II, 1343-1346.
- 56 例えは以下の論考を参照。Jung Mo Sung / Allan da Silva Coelho, Ein Ausweg aus dem Labyrinth. Walter Benjamin und die Befreiungstheologie, in: Kapitalismus, 235-254.

この点は、論集『資本主義という、死をもたらす負債の祭儀ーヴァルター・ベンヤミンの預言的遺産』のみならず、「解放の神学」の全般の特徴である。例えば同論集にも寄稿しているウルリッヒ・ドゥクロヴとフランツ・ヒンケラマートによる以下の共著を参照。Ulrich Duchrow and Franz J. Hinkelammert,

Transcending Greedy Money: Interreligious Solidarity for Just Relations, New York 2012.